



三重県保健環境研究所

みえ保環研ニュース

私たちは、皆様の健康で安全な暮らしを科学でサポートしています。

第 38 号(2010 年 9 月)

2009/10 シーズンのインフルエンザ発生と今後の対策

2009 年、メキシコ、北米での患者発生に端を発した新型インフルエンザ (A/H1N1pdm) の流行拡大を受け、わが国は水際対策を強化しましたが、2009 年 5 月に神戸市で最初の報告があり、その後、兵庫県のその他の地域、大阪府でも患者発生が認められました。国、地方自治体が積極的な対策を展開した結果、しばらくは新型インフルエンザの感染伝播が低く抑えられていましたが、夏季に入り全国各地で“くすぶり流行”が続き、小中高等学校等の夏休みが終わった 9 月以降全国各地で集団感染が急増しました。北海道、沖縄をはじめ各地で特徴的な発生動向を示すとともに、多数の患者発生が報告され、秋季をピークとする異例な流行様相を呈しました。

全国および三重県の発生動向

2009/10 シーズンのインフルエンザ流行状況は、例年に比べ流行が早く始まり、全国(平均)における定点当たり患者報告数は 10 月下旬に国立感染症研究所が定める警報開始基準

(30 人/定点) を超え、11 月下旬をピークに減少しました。都道府県別に見ると北海道で他の都道府県に先駆けて多数の発生が報告がされました。沖縄県では、夏季に大きな流行がみられた後減少し、10 月から再び増加に転じ、年末をピークとする流行がみられたほか、大都市圏では、福岡県や愛知県で大きな流行がみられたのに対し、東京都や大阪府では、比較的少数に止まるなど、地域により異なった流行状況を示したことが特徴としてあげられます。

三重県では、7 月中旬に桑名保健所管内において小中学校等での集団発生がありましたが、大きな流行には至りませんでした。その後 9 月下旬から急増し 10 月下旬をピークに大きな流行がみられ、12 月に入り減少に転じました(図 1)。2009/10 シーズンを通じた定点当たり患者数累計は全国で 10 番目で、保健所管内別で見ると、北勢地域、特に桑名保健所管内で多数の患者発生報告がありました。また、全国におけるインフルエンザウイルスの遺伝子検査により 99%以上が新型インフルエンザであることが判明し、季節性インフルエンザウイルスの A ソ連型 (A/H1N1) の分離・検出報告はなく、A 香港型 (A/H3N2) と B 型の報告がわずかであったことも特徴的でした。

インフルエンザ患者総数

三重県における 2009/10 シーズンのインフルエンザ患者総数(推計値 329,600 人)は、2000/01~2007/08 の 8 シーズンの季節性インフルエンザ患者を対象として推計したシーズ

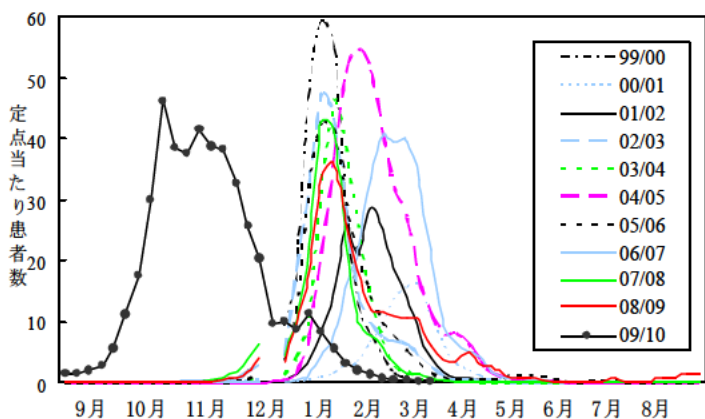


図 1 2009/10シーズンおよび過去10シーズン 三重県インフルエンザ流行状況

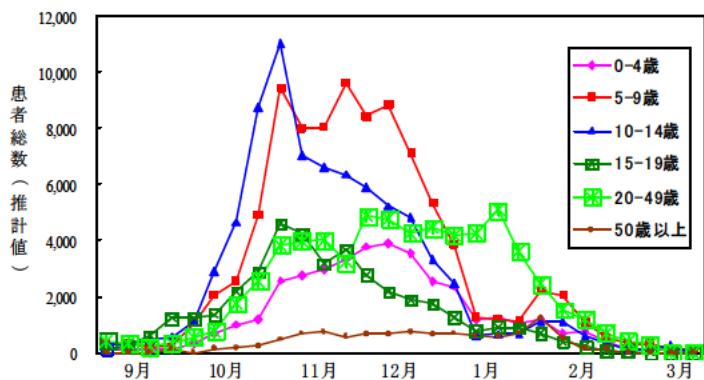


図2 2009/10シーズン三重県インフルエンザ
年齢階級別患者総数（推計値）推移

ン当たり平均患者総数（推計値 163,000 人）の約 2 倍の流行規模であったと考えられます。

集団かぜ発生状況は、時間の経過とともに、高等学校、中学校、小学校、幼稚園と低い年齢層に移る傾向を示し、年齢階級別・週別患者数（推計値）は、流行開始当初は 15～19 歳の高校生を含む年齢層が多数でしたが、10 月に入り 10～14 歳が最も多くなり、11 月から 12 月中旬では 5～9 歳、12 月下旬からは就学世代ではなく、20～49 歳の成人で多くなりました（図 2）。また、学校・学級閉鎖の措置がとられた施設の割合は高等学校 85.4%、中学校 92.7%、小学校 94.6%、幼稚園 69.0%でした。

インフルエンザ患者推定罹患率をみると 5～14 歳は 80%以上がすでに罹患したと考えられますが、0～4 歳、15～19 歳は 50%以上、20 歳以上は 90%以上が未罹患と推定されました。

現在の海外での流行

世界保健機構（WHO）は、2010 年 8 月 11 日に専門家による緊急委員会を開催した結果、新型インフルエンザ警戒レベル「フェーズ 6」から「ポストパンデミック」期に移行したと

発表しました。海外では、インドで流行がみられる他、南半球では、ニュージーランドで昨年流行が小規模だった地域を中心に流行が見られるものの、オーストラリアでは例年に比べ遥かに低い発生となっています。

今後の対策

南半球の状況を参考に今冬の流行を予想すると、昨年流行が小規模だった地域を中心に流行が見られる可能性があります。大きく流行した地域では、散発的な発生にとどまると考えられます。

今後の対策を考える上で重要なことは、昨シーズン（第一波）の流行で成人の 90%以上が未罹患と推定されること、死亡者の多くは 10 歳未満の乳幼児、基礎疾患を有する中高年齢層であったこと、2008 年から大きな流行のない A 香港型の流行も懸念されることが挙げられます。加えて、抗インフルエンザ薬（オセルタミビル）耐性新型インフルエンザウイルス株の検出は現時点では少数例に止まっていますが、全世界の 70%以上のオセルタミビルを消費しているわが国は、国内における耐性株の発生動向に十分注意を払う必要があります。

これらのことを踏まえて、ワクチン接種を行うなどの予防対策をとる必要があると考えられます。

※今冬のインフルエンザワクチンは、新型（A/H1N1）と季節性（A/H3N2 及び B 型）の 3 つの株が混合されたものが 10 月から供給されることになっており、医療機関にお問い合わせのうえ、ワクチンの接種を心がけてください。

—編集委員会から—

みえ保環研ニュースについて、ご意見・ご質問等がございましたら下記までお寄せください。

三重県保健環境研究所

〒512-1211 三重県四日市市桜町3684-11

E-メールアドレス hokan@pref.mie.jp

三重県感染症情報センターホームページ

TEL 059-329-3800 FAX 059-329-3004

ホームページ <http://www.hokan.pref.mie.jp/>

<http://www.kenkou.pref.mie.jp/>